

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一步のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になり、大切な人の死が縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。それは、悲しみを乗り越えない生き方であり、悲しみを包み込んだ人として生きることだと思っています。

四 七 日

1. 『仏説阿弥陀経』

今回は『仏説阿弥陀経』の話をしようと思います。私は、「お葬式は『阿弥陀経』で始まって、『阿弥陀経』で終わる」とよく言います。

私は、門徒さんが亡くなったと聞くと枕経に駆けつけます。枕経と言いましたが、正式には臨終勤行と言います。臨終の時に、『阿弥陀経』をあげます。だから正式には、亡くなる前に臨終勤行の依頼を受けるべきなのでしょうが、現実的ではありません。私は、亡くなったと聞くとで

きるだけ早く駆けつけるようにしています。深夜であろうが、夜明け前であろうが駆けつけます。ときに、門徒さんが夜半に亡くなったと聞いても、夜が明けてからお参りに行く坊さんが「枕経ではなく、臨終勤行なのです」と言うことがあるそうです。困ったものです。

臨終勤行の後、通夜・葬儀と続きます。葬儀の後、お骨になって帰ってこられて、『阿弥陀経』をあげます。正しくは還骨勤行と言います。ここまでが「お葬式」です。だから

臨終勤行の『阿弥陀経』に始まり、還骨勤行の『阿弥陀経』でお葬式は終了するのです。

2. 『阿弥陀経』の序論

なぜ『阿弥陀経』なのか？それはこの経典の内容を説明すればいいと思います。

仏教のお経は、序分(じょぶん)・正宗分(しょうしゅうぶん)・流通分(るずうぶん)と言う三部構成になっています。序論・本論・結論と読んで下さい。

『阿弥陀経』の序論は「如是我聞」というフレーズから始まります。「私はお釈迦様からこのように教えを聴きました」というところから始まります。舎衛国(しゃえこく)の祇樹給孤獨園(ぎじゅきつこどくおん)と言うところで、教えを聴いたといいます。そして、たくさんの証人の名を連ねています。これは、間違いなく仏説ですよと言っているのです。お経の正当性を語ります。

3. 極楽

次に本論です。まず始めに、これより西に十万億仏土を過ぎたところに、世界がある。それを極楽と言う。その極楽には阿弥陀仏がいる、と述べます。

極楽は西にあると言うのですが、極楽という言葉について考えて見ましょう。楽の極みであります。楽が100%であれば、苦は0%になり

ます。大切な方が亡くなられた時、その方の人生を考えて下さい。苦と楽は相半ばしているでしょうか？私は、いろんな方の枕経にお参りをしました。どの方も苦勞が楽に勝った人生を歩まれました。中には苦勞ばかりだったと思える方もいらっしゃいました。大切な方の臨終に際して、近親の方がその苦勞を偲んでいただければ、それが枕経の時の作法だと思います。

その極楽は、西方へ十万億仏土の彼方にあると言います。この十万億仏土というのはどんな距離でしょう。十万億仏土という距離の単位はありません。その答えは、「遠い」でいいのだと思います。とっても遠いのです。人類がどのようなロケットを開発しても、とうていたどり着けない距離、それが十万億仏土であると思います。もし仮に、十万億仏土を飛ぶロケットを作ることができれば、極楽に行って亡くなった人を取り返してくればいいのです。でも、そのようなことはできない距離だということです。死を取り消すことなど人類にはできないと言うのです。

『阿弥陀経』は、ここから極楽の様子を語ります。極楽の素晴らしさについて池には蓮の華が咲いていると言います。その大きな華は、青色は青い光を放ち、黄色は黄色い光を放ち、赤い色は赤い光を放ち、白い色は白い光を放つと述べます。こ

の部分については、当たり前のことなのです。青い色が赤い光を放つことはありません。当たり前のことを、そのまま受け入れることです。あるがままを受け入れるのは素晴らしいことでしょう。予断を挟まず、あるがままを受け入れることは、難しいことでもあります。愛する者の死を受け入れるのは、非常に難しいことです。斎藤茂吉の歌集『赤光』は『阿弥陀経』からとったタイトルであると、自ら記しています。

4. 往生

『阿弥陀経』の本論は、極楽の様子を描きますが、それは本論の前半部分なのです。後半では、その極楽に至る様子を描きます。

『阿弥陀経』は「その人、命終のときに臨みて、阿弥陀仏、もろもろの聖衆と現じてその前にまします。この人終らんとき、心顛倒せずして、すなはち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得」（『浄土真宗聖典(註釈版)』浄土真宗本願寺 p124-125）と述べます。息を引き取るとすぐに阿弥陀仏が迎えに来てくれるのです。そして、すぐに極楽に連れて行ってくれるのです。私は、ここは『阿弥陀経』の核心部分だと思います。

少し私の個人的な話におつきあい願います。私の父は、膠芽腫(こうがしゅ)という脳の病気で亡くなりました。担当医から、半年の命で

あろうと説明を受けました。本人は自宅に帰りたがっているし、病状の進行を考えてもそれは可能であるし、自宅で安らかな死を迎えるだろうと説明して下さいました。自宅に父親を連れて帰って、5ヶ月で父は息を引き取りました。確かに自宅で看取ることが可能でしたが、人の臨終までの経過は、それは大変なものでした。その大半を支えたのは私の妻でした。本当によくやってくれました。

素人目にも父の死が近いと思われた頃でした。往診に来てくれる近所のホームドクターが、往診の帰り際に、私にボチボチ覚悟をするようにと言って帰りました。私は父親の死をどうやって覚悟をするのか分かりませんでした。重苦しい夜が明けて、土曜日の朝でした。週末は法事の予約でいっぱいです。私は、法事に出かける前に、父親の手を握って、法事が終わるまで頑張っていてくれと言って出かけました。法事のお宅は、寺から数十メートルの所でした。挨拶をして、仏壇に向き直ってお経をあげようとしたときでした、妻が、そのお宅に駆け込んできました。お父さんがもうだめだという声が聞こえました。私は、法事の席の人たちに許可を得て、走って帰りました。帰り着いた時には、父の息はありませんでした。その時、私は『阿弥陀経』をあげたいと思いました。でも、法事のお宅では人々が

待っています。私はこのお宅に戻って法事を勤め始めました。

法事では『阿弥陀経』もあがります。『阿弥陀経』のこの部分に達したとき、私の頬を熱い涙が流れました。お経をあげながら、目に浮かぶような気がしたのです。今さっき息を引き取った父親が、阿弥陀様に連れられて極楽に行く様子が目に浮かぶように感じたのです。その光景が実にありがたかったのです。

5. 六方段

この後は、六方段と呼ばれているところ。東の方向には仏があっ

て、○○仏、△△仏、◇◇仏とかで

す。さらにガンジス川の砂の数ほどの多くの仏がいて、時空を超えた世界を覆っています。南の方向には、また同じように仏名の羅列です。そして、ガンジス川の砂の数ほどの多くの仏が、大世界を覆っているのです。

西の方向には同じことです。北の方向にも同じことです。下の方向にも、上の方向にも同様です。

これは六方向に仏様がいっぱいいるということです。これは、全ての空間が仏によって満たされている状況だろうと思います。この中心にいるのは阿弥陀様です。極楽は阿弥陀様に救われて仏になった方が

いっぱいおいでになります。今、新たに阿弥陀様によって救われた方は、阿弥陀様と共に極楽のど真ん中に生まれて行くのでしょうか。

私はこの様子を、こんなふう想像します。今、新たに仏と成って極楽に来たあなたは、何も恐れることはないのです。かつてあなたの知っていた方も既に仏と成ってあなたの周りにいらっしゃるのです。何も心配するような世界ではないのですよと。私は、この六方段というのは息を引き取って極楽往生される方への優しさだと思うのです。

ところで、私は火葬場からお骨とともにお帰りになったら、お骨と法名をお仏壇の中に入れて下さるようお願いしています。一般的な仏教の場合は床の間に中陰壇という物を組んで、そこに安置することが多いのですが、浄土真宗では即得往生を説くのですから、亡くなると直ぐに極楽浄土においでになります。浄土真宗のお仏壇は、金仏壇が一般的であるのは、それが極楽を模した物であるからです。だから、この六方段で説かれるように亡くなられた方が極楽の中央に阿弥陀様とともにいらっしゃる様子を思って、お骨と法名をお仏壇に入れていただくようお願いしています。

6. 結論

六方段を説き終えたら、「およそ男子であれ女子であれ、善良な在家

の信者が、この仏がたがお説きになる阿弥陀仏のみ名とこの経の名を聞いてよく心にとどめるならば、これらのものはみな、あらゆる仏がたにひとしくまもられて、この上ないさとりに向かって退くことのない」(『阿弥陀経』瓜生津隆真著 p.152)と述べて結論に向かうのです。出家も在家も男女も区別なく平等に救われるのです。

そして、結論では難信の教えであると述べています。この教えを本当に理解して受け入れるのは難しいのです。私は、大切な人を亡くしてとても深い悲しみを知る人が、この経典の価値を知ってくれることを願っています。